

資 料

異文化に柔軟に対応できる助産師育成を意図した 国際助産活動の実習報告

Practice Report of midwifery International Midwifery Activities that are Intended to Promote Midwifery Education that can Respond Flexibly to Cultural Differences

曾我部美恵子¹⁾, 小嶋理恵子¹⁾, 夏目奈緒子²⁾

1) 関西看護医療大学 看護学部 母性看護・助産学

2) 関西看護医療大学 看護学部 母性看護・助産学 非常勤講師, NIC SERVICE 院長

Mieko Sokabe, Rieko Kozima, Naoko Natsume

1) Kansai University of Nursing and Health Sciences Faculty of Nursing, Maternity Nursing & Midwifery

2) Kansai University of Nursing and Health Sciences, Master of Nursing and Midwifery & apart-time lecturer, NIC SERVICE director

要旨: 時代とともに変化する社会的ニーズを敏感に受けとめ、国際化社会と母子保健を理解することが、助産師の専門職自律能力として求められている。そして、在日外国人、海外在住の日本人を対象とする助産師の妊娠・出産・子育て期に対する支援が必要である。そこで、異文化に柔軟に対応できる助産師として、対象理解のため、日本以外の国の文化を受け入れながら対応する経験を踏むことが重要になると考える。これらに関する講義・実習科目を組み込みカリキュラム構成している。

今回、日本の出産文化と比較しながら、異文化の対象理解とその対応の実際を知り出産・助産の文化的多様性を習得することを目標とした国際助産活動として実習を行った。実習方法として、アメリカ・ハワイ州のクリニックの実習を中心に、出産風俗、文化、社会のあり様、価値観をふまえた母乳育児および母子保健活動の現状を視察したので報告する。

キーワード: 異文化、助産師教育、国際助産活動、実習報告、ハワイ

Keywords: cultural differences, midwifery education, international midwifery, Hawaiian midwifery

I. はじめに

在日外国人および海外在住日本人の妊娠、出産が増加する今日、助産師には、在日外国人、海外在住の日本人を対象とする助産師の妊娠・出産・子育て期に対する支援ができる能力が求められている。そこで、異文化に柔軟に対応できるように、また異文化の対象理解を深めるためには、助産師に日本人以外の国の文化を受け入れながら対応す

る経験を踏むことが重要になると考える。

その背景を概観すると、国際母子保健において、直面する問題やその対策、援助について考え、行動できる助産師の育成の必要性が言われている。海外で活動を経験した助産師である新福(2010)のタンザニアでの助産活動の経験から学んだ Cultural Humilityの報告があり、また、青年海外協力隊、ジャイカ、フィリピンなどでの助産師

の国際活動報告がある。

教育の観点から、佐山（2008）は、学部教育における国際看護学実習の展開としてタイ王国北部の主な地域の様々な施設を訪れ、活動する人々とディスカッションすることで、保健医療看護の現状を知り、異文化理解を体験的に学ぶ機会をもち、国際看護学実習の果たす役割は大きいと報告している。また、鈴木（2011）は、カンボジアでの国際保健助産学実習に参加した大学院生の体験を明らかにすることを目的とした質的記述的分析を行っている。そして、李（2006）は、日本社会の在日外国人母子が出産、子育てができるための支援策を述べている。

さらに、藤原（2006）は、異文化圏からの人々の出産に対する助産ケアの現状として、異文化圏からの人々のケア経験がある臨床助産師から半構成面接法により、質的記述的研究を行っている。異文化圏からの人々を尊重しようと努力し、よいお産をめざしてケアを提供しようとしていることを明らかにし、多職種との連携やサポートシステムが、ケアの向上には不可欠であることを報告している。

また、藤原（2008）は、Culturally Congruent Care（文化を考慮したケア）の概念分析により、文化を考慮したケアを「対象者と看護者の文化的な相違を理解した上で、ケアの中心である対象者の文化的背景を考慮して柔軟に調整できる社会構造の変化にも調和したケア」と再定義し、「個」を重要とするケアが重要であり、Culturally Congruent Careは看護の発展に貢献する概念であり、日本において更なる検討が必要であると述べている。

一方、ハワイ州ホノルルでの調査を行った谷口（2000）の日本人女性の異文化での妊娠・出産に関するコーピング（対処）と今後の母子保健対策では、妊娠当初は、多くの戸惑いを感じていたが、徐々に妊娠を受け入れ異国での出産となっていた。その過程に至るコーピング（対処）に安全性の確保、日本人としての認識、日本人同士の助け合い（カルチャーサポート）が浮上し、移住当初の2年未満に法人の母子保健対策の必要性が示唆されたと述べている。また、谷口（2011）によると、ホノルルに移りまだ異文化になれない時期に母親に

なった日本人女性の出産体験は、精神的な成熟を促し、母親になったことを肯定的に受け止めていたと報告している。

これらから、在日外国人、海外在住の日本人を対象とする助産師の妊娠・出産・子育て期に対する支援が必要である。加えて異文化に柔軟に対応できる助産師とは、日本在住の外国人、海外に在住している日本人のどちらにも対応でき援助ができることが望ましいと考える。それらを踏まえてその対象理解のためには、日本以外の国の文化を受け入れながら対応する経験を踏むことが重要になるだろう。高度実践コースを標榜する助産師基礎教育ではこれらに関する講義・実習科目を組み込むことは必須と考え、カリキュラム構成している。

今回そのカリキュラムに従って、日本の出産文化と比較しながら、異文化の対象理解とその対応の実際を知り出産・助産の文化的多様性を習得することを目標とした母性看護・助産学実習を行った。

実習方法として、アメリカ・ハワイ州のクリニックの実習を中心に、出産風俗、文化、社会のあり様、価値観をふまえた母乳育児および母子保健活動の現状を視察したので報告する。

II. 本学のカリキュラムと実習内容

国際母子保健関係科目の授業科目は、基礎助産学に含まれる必修科目として、「助産文化・国際論」をおき、タイ、ブラジル、ハワイの異文化の出産文化と母子保健に関する講義を行っている。また、母性看護・助産学セミナーとして、周産期と育児期における在日外国人の健康問題に対応するための授業科目としてハワイの実情を学ぶ機会がある。母性看護・助産学実習においては、モンゴルの出産風俗・文化、社会のあり方や価値観など現地で母子保健活動を経験する科目を設けている。

今回、ハワイで助産師としてクリニックを開業され院長でもある夏目助産師（本大学院非常勤講師）からイギリス、オランダ、シンガポールにおける助産師としての体験と、ハワイでの助産師活動の講義を受け、その後、国際助産師活動の実際を現地の参加型実習で行う機会を得て、2人の院生が参加し、現地で5日間（6泊7日）行ったので、その内容を報告する。

1. 実習目的

アメリカ・ハワイ州の出産風俗、文化、社会のありようや価値観などを踏まえた母子保健活動の現状を視察し、日本の出産文化と比較しながら、出産・助産の多様性を理解し習得する。

2. 実習目標

- 1) ハワイの出産風俗、文化、価値観などについて学ぶ。
- 2) ハワイ州の多民族の文化、社会のあり様や価値観などを踏まえた母子保健活動の現状をクリニックでの参加型実習を通して学ぶ。
- 3) ハワイにおける周産期医療システムと日本の周産期医療システムについて比較し、対象にとって必要な周産期医療システムについて考察する。

Ⅲ. 助産師活動参加・見学実習の内容と学び

今回2人の院生が実習を行い、クリニックに来院した8月29日：4人、9月1日：5人、9月2日：3人、9月3日：2人の妊産褥婦、乳児、同伴した夫や実母などの家族にかかわる。妊婦健康診査受診、産後の母乳継続、断乳のため援助を受ける女性、体外受精をして出産した女性の母乳育児支援など、ハワイで生活する日本人、日系人への援助につかして頂いた。口頭で了解を得た女性に来院した理由、出産時に病院で受けた母乳育児への援助などをインタビューさせて頂いた。そして、夏目助産師のケア実践を通して、異文化の対象のケアニーズを踏まえた援助の実際を見学した。

院生がインタビューを行う際、日系人の場合の通訳は、夏目助産師およびクリニックで働く女性に通訳を依頼した。診察室には、夏目助産師、院生2名で入ることが多かった。日系人の来院者のコミュニケーションは英語であるため、夏目助産師が指導の実際を、院生に見せながら通訳を行ったので、直接的な関わりを理解できた。

クリニック内で院生が関わった学びのレポートをもとにまとめた。

1. 出産支援システムと母乳育児支援の状況

主として、ハワイ在住の日本人からの話を聞くことで、アメリカ・ハワイ州の医療制度や文化的

背景とそれらが健康行動にどのように影響しているかを知ることができた。

1) 出産施設のシステム

アメリカ（ハワイ州）における出産の入院期間は48時間である。個人が掛けている保険の補償制度の金額により異なるが、入院費用が高いことによる。院生が来院した対象者にインタビューをすることで、クリニックに通っている女性達の分娩方法は、自然分娩の他に、硬膜外麻酔での無痛分娩であることがわかった。また、延泊が希望でも、保険会社の許可がなければ退院させられてしまう。体調が回復しないまま、母乳哺育技術もわからぬまま退院していくことが当たり前であった。母乳育児に対する価値は低く、粉ミルクが主流となり、病院でも粉ミルクが勧められるため、疑問に思うことなく母親は粉ミルクで育児を行っていた。産後3か月で仕事に復帰する女性が多く、ハワイの物価高によって共働きをする女性が多いため、早期に仕事に復帰するため粉ミルクが助長されていた。

産後は、1～2日、数日で退院するために入院中に受ける母乳育児に関するケアは、病院の看護師により、児の吸啜状況の確認、吸啜が良好であれば「良い」と伝えられ、抱き方、吸い方などのチェックをしていくことが主なケアであった。

2) クリニックで行われている母乳育児支援

(1) 産後の母乳育児継続ケア

出産した施設で、ミルクを補う説明を受けていた母親達は、自宅に帰ってからは、ミルクをのませていることが多い。しかし、母乳育児を継続したい母親達の口コミ情報によりクリニックを知り、訪れていた。また、乳房緊満感がひどくなり、乳腺炎の乳房トラブルを起こしそうになった褥婦や卒乳を希望する方も乳房ケアをしてもらうために訪れていた。クリニックでは乳房マッサージのケアの他に、自分で母乳育児を行うためのセルフケアを習得するための指導がなされていた。

ハワイでは日本のように母乳マッサージなどの文化はなく、母親は、母乳栄養の良さや母乳に関する知識をもち、母親同士の口コミで広まりクリニックに来ていた。クリニックは、退院後に自宅に帰ってから母乳育児を希望する家族の支えになっ

ていた。

入院期間が短く、出産後48時間で退院するシステムの中では、母乳育児継続を希望する女性にとって国籍を問わず、このクリニックのような、退院後に十分ケアを受けることができるシステムが重要な役割を果たしているのを感じた。

(2) 妊娠中からの母乳育児に関するサポート

ハワイ在住である日本人、初産婦である妊娠36週の勤労妊婦が来院し、出産後の母乳育児のための準備についての夏目助産師の指導場面を見学した。初めてクリニックを訪れて、健診、指導やケアを受ける場合は情報収集をするため2時間ほどかけて行う。産後の授乳について話しながら、妊娠中からの乳房ケアについての実際を、母乳の分泌メカニズムや乳房断面図、乳房モデルと児のモデルを使いながら抱き方や授乳の仕方を具体的にわかりやすく説明し、出産後に母乳育児をすることのイメージを付けるようにかかわっていた。知識の確認をしながら、シミュレーションをすることで出産後の母乳育児のセルフケアにつながる援助がされ、自ら「母乳で育てたい」という意識がしっかり持てるような援助であった。出産後に自分が何をしたらよいかをわかり、産後にクリニックを受診できるように、すぐに母乳栄養をしていくための支援を具体的に説明していた。褥婦が必要なときに、クリニックを尋ね、助産師のケアを受けることができることは、外国で妊娠や出産する女性にとっては、安心できる場の提供であると考えた。

また、妊娠による貧血があることを知らなかったこの妊婦に、病院では説明がなかったことから健康への意識づけを行い、貧血のための指導をした。病院に妊婦健診で通院していても、妊婦の健康教育や生活指導がなされない状況があることを知った。

3) その他のクリニックの役割

(1) 出産準備の継続的ケア

ハワイでは無痛分娩が主流のため麻酔科医や産科医、小児科医が関わるが多く助産師がかかわる機会が少ない。何人もの母親の出産に対する話を聞き、多くの女性が出産に不安を持っていることから助産師による継続的なケアが必要である。

母乳育児に関しては、国や地域に関係なく母親が母乳で育てたいと思っている場合、母乳で育てるための情報やサポートが少ない場合あきらめてしまう人が多いことから、情報提供しサポートしていける環境が必要である。

(2) 育児期の交流の場

母親と乳児が集まりをもつクラスを運営している。「キッズのおうたを歌おう」クラスでは、45分間の母親と子どもが一緒になって歌い、発達に合わせた遊びを行っていた。この日は、指人形をもった男性も入り、楽しい時間を過ごしていた。このクラスに通い母乳育児支援を受けた母と子（父親参加もある）の自主的な集まりともなっている。乳児期の母親が希望時に自由に集まれるような場の提供と企画があり、母親が継続しての交流する機会をつくり、情報提供や意見交換をする場であり、異国での日本人同士の助け合いのピアグループのカルチャーサポートの役割も果たしていた。

(3) 海外の出産へのサポート

結婚後、ハワイ移住し、海外で出産することになった異国在住の妊婦にとって異国での出産はさらに不安を増強させる可能性があり十分なケアが必要である。クリニックで行われている妊娠、出産、育児における情報が事前にあるかないかでは産後の育児が大きく変わると考える。

(4) 日本里帰りのサポート

日本人であるがハワイの永住権がまだとれていない女性があり、3か月ごとに日本に帰る女性もいた。日本に帰った時に受診できる医療施設を自ら選択し、妊婦健診ができる病院の紹介をした。また、クリニックで母乳育児を受け日本に戻った時に、幼児期になっても母乳哺育を希望する母親には、母乳育児のケアが受けられる施設を探すための情報提供をすることが大切である。

(5) 高度生殖医療を行い妊娠、出産をした女性への援助

胎外受精後の妊娠でダウン症の児を産んだが、医療費が高いため宗教団体に養子に出した方もいた。医療費が高いことや養子縁組制度に特徴があり、子どもとの面会やビデオで様子がわかるなど、オープンな関係であることにより、様々なサポートで子供の育児を守っていることがわかった。

(6) 代理出産：代理母との母子の絆

代理母に子どもを産んでもらい育てている女性に出会った。1人目を産んだ後、子宮摘出手術をし、2人目を代理出産で産んでもらった女性に、母乳育児をしてもらった話を聞いた。「出産しなかったが、一時的に母乳分泌があることや、母乳で育てたいこと、母子と一緒に過ごす代理母との絆の大切さ、母から子への愛着を感じた。代理母をしてくれた友人、家族のサポート、母乳で育てたい母親の意思の大切さについて学んだ。代理母との関わりがオープンであることがわかった。

4) クリニックにおける指導内容と異文化への関わり方

夏目助産師が、母乳に関して指導をしていたことは、母乳分泌を促進する方法、母乳分泌をよくするための夜間授乳の方法やメカニズム、乳腺炎にならないように予防面など、クリニックから自宅に戻ってもセルフケアができるように実際にわかりやすく伝えていた。また、母乳栄養をしてきた褥婦をほめ、やってきたことを保障することでメンタル面のケアをしていた。それぞれの民族の特徴を知り、生活面で実行できることや家族への指導も行っていた。

日系人やハワイ以外の国籍をもつ褥婦が来院しても言語的障害がない会話のやり取りであった。

IV. ハワイ州の施設見学

1. Mary Jane Home

ハワイ社会の母子保健の現状を表す、シングルマザーのためのサポート施設 (Mary Jane Home) を見学した。

この施設は、25年前に設立されたNPO法人である。メアリー・ジューン・プログラム (カトリック・チャリティー事業) を実施する施設で、18歳以上の女性 (独身、安全でないところに住んでいる、家族からのサポートを受けていない) を受け入れ、妊娠中から産後4か月まで共同生活をする。プログラム内容は、シングルマザーで妊娠中の女性の金銭面での支援だけでなく、ユニークな環境としての居住の提供 (6部屋のプライベートルーム) と個人とグループでのカウンセリング、出産・養子のプログラム、幼児のケアなどの教育の機会が与え

られるシステムである。

女性自身と子どもを産むという決断、子どものために一番良い決断ができるようなサポート、女性自身の人生のゴールに向かって進めるように産前・産後のサポートのプログラムが立てられていた。

民家と同じブロックにある環境が良い施設であり、ハワイアンやアジア系の女性が多く、オアフ島以外からサポートを受ける人もおり、受け入れとして麻薬使用者は精神状態が悪いので難しいということであった。

妊娠中の女性と、授乳をしているシングルマザーの2人がサポートを受けていた。妊娠、出産、その後の子育て、養子縁組など教育としてプログラムをくんで、将来の計画を立て生活ができ、安定した場所やシステムがあることがわかった。

日本では、予期せぬ妊娠を経験したシングルマザーのための無料で居場所を提供する施設はない。金銭面や知識がないために妊婦健診の未受診者になったりする。出産は、授産施設があり利用する制度があるが、出産後は、養子に出されるケースもある。

2. ハレイヴァ・ファミリーセンターの見学

妊婦・産婦・褥婦が受ける医療制度の違い (保険) を学ぶことができた。地域の病院として健康に関する様々なケアを提供している病院である。ハレイヴァ・ファミリーセンターで家庭医を専門としている日本人の医師から話を聞く機会があった。

保険会社の保険によってケアが決められる、高額な保険をもっている人はいい医療が受けられるため、ケアを決めるのに差別が出てくることを話された。保険会社の監査のチェックが入る。診察、検査、処方、予防をするが、必要時に専門家のいるメディカルセンターを受診してもらう。家庭医はプライマリーケアを行っている。日本とハワイの医師は、家庭医になるまでの専門医としてのトレーニング期間が異なること、レジデンスにおいて専門性が決まることなどを話してくれた。

(1) 地域で働く助産師の必要性

産科と婦人科においては専門の産婦人科医がセンターにおり、患者が妊娠とわかったら、専門家の受診を進める。妊婦健診をして出産までかかわるが、退院したらその後は見ないとのことであっ

た。このことから、産後ケアをするなど地域で働く助産師の必要性が伺えた。

3. シュライナーズホスピタル・フォー・チルドレン（ホノルル）

整形外科系，神経筋骨格，神経発達に関する傷，障害や病気の分野において特に優れた治療とケアを提供する子ども病院であり，カラフルで子どもに優しい環境と家族にとっても心地よい環境を備えている病院であった。火傷や口唇口蓋裂を持つ子供の治療に子どもが最もよい状態にたどりつき，できる限り顔面の修復がなされるように，自信と自尊心を高める手助けを意図としたプログラムが用意されていた。ハワイと太平洋沿いの地域の子どものための病院であり，日本の沖縄からの患者も受け入れている世界レベルの高い規模の病院であった。

(1) 子ども病院の社会的な役割

外観は病院という雰囲気はなく，内観も子ども病院であるため，デザインは明るい絵が沢山，壁に書かれており日本の病院とは違った雰囲気であった。家族が宿泊できる部屋の工夫や，入院している子どもが参加できる治療以外の配慮がなされていた。医師を小さなエリアに派遣するなど，さまざまな取り組みが行われていることを学んだ。ハワイの病院は保険によって受診できる場所が決まるが，この病院では経済的に問題があっても断らず受診するようにしており，ハワイに住む貧しい人達にとってもとても良い病院である。

4. ハワイプランテーションビレッジ

ハワイは多民族国家である。ハワイのサトウキビプランテーション時代のストーリーを物語る野外博物館で，1900年から1930年後半までプランテーションで働いていたさまざまな国の労働者の生活を示す展示物が各国の住居に収められているところを日系人の案内により見学した。ハワイではさまざまな移住者と共にその国の文化があり，復元された建物とレプリカ，植物から村をつくっている。当時，ハワイ文化に，ポルトガル，中国，韓国，沖縄，日本などの移民者が，それぞれの文化をとり入れながら生活をしていた。若宮稲荷神社，日本人の家，豆腐屋，風呂屋，散髪屋などのレプ

リカがあった。当時，日本からも助産師が送られてきたことを聞いた。約200人の助産師がハワイに移住し活躍したことの説明があった。淡路島の菊川助産師の師がハワイで活動していたことの記述を読んだことがあったことを思い出した。

(1) 文化の多様性

日系人など多民族の集まりであるハワイでは，ルーツもさまざまであり，クリニックに見える女性も，ハワイ出身の女性もいたが，様々な出身の民族の集合体であり，多様な文化が存在している。純粋なハワイアン文化，それ以外の住民が持っている国の文化など多様であり，出産・育児に文化が影響しているためどのようなものが影響しているのか知ることが必要である。

5. クカロニコ・バーストン

王族の出産場所であった場所である。出産場所がいかに神聖な場所とされていたか知ることができた。草原の一角に，赤茶色の石がおかれている場所であり，神聖な場所として伝えられているところである。石のそばに行くとパワーが感じられるという伝えもある。静寂な中で，石の不思議なパワーを感じる一瞬を過ごした。

V. 助産師育成に臨床・大学との共同実践教育の必要性

今回の実習は，夏目助産師とともに実習内容を検討し，施設見学を含め準備をして頂き実現したものである。院生は，事前学習として，日本で講義を受けイメージできたことを，ハワイで母子に対する母乳育児の援助をしている助産師の実践者として，国際的に活躍する夏目助産師について実際に学んだ。その活動を通して夏目助産師の果たす助産師としての役割の大きさを学んだ。母親，夫やその家族も，ハワイにいてケアを受けることができた存在感のある助産師であることを語ってくれた。

異文化への理解として，文化人類学を学んでいる夏目助産師は，文化は作っていくものであり，皆に伝えていくもの，相手を受け入れるためには，固定観念が強いとシャットアウトするので，心で動いた方が，行動がやさしくなる。このような考えで，妊産褥婦さんと関わって，健康を促す援助

をしていた。実践の場面に参加し体験できたことは、助産師として感動をするものがあり、助産師の役割を学ぶ院生にとっては、感銘を受けた実習であった。

実習目標に照らし合わせれば、ハワイの出産風俗、文化、価値観については、インタビューや、ハワイプランテーションビレッジの見学により垣間見ることができた。参加型実習をすることで、クリニックを訪れる日系人や日本人の母親が育児をしている現在の思いや病院での出産体験、今後の母乳育児支援、健康管理など夏目助産師のエネルギーギッシュなハワイの母子への支援活動を直接知ることができたことは、院生が助産を学ぶものとして一回り大きく成長させてくれたと考える。出産に関わる周産期の医療システムをハワイと日本の比較をすることで、院生は、日本とハワイの医療システムや周産期の違いを実際に見学し、妊産褥婦のニーズが共通していることも多く、自分自身がニーズに沿ったケアが行える助産師になりたいと考えていた。

今回、ハワイの実習は、谷口氏から講義を受け学習したことも母性看護・助産学実習をハワイでしたいという思いにつながった。ハワイの母子保健を理解するために、谷口(2000)は異文化、日米の医療の違いの中で妊娠、出産にかかわる実態調査から邦人の母子保健対策を示唆した、孤独、孤立から、戸惑いを感じ、異国で出産をする過程のコーピング(対処)として安全性の確保、日本人としての認識、日本人同士の助け合い(カルチャーサポート)をあげている。また、谷口(2011)のハワイの在日日本人の異文化に社会に慣れない時期に母になった日本人女性の出産体験の研究は、「母となる意味：外国での出産体験」において、外国での出産経験は異文化適応でなく多くの身体的精神的困難から、家族中心の社会環境から、夫婦との絆を培い、ホノルルで母となる出産体験は精神的な成熟を促し、母親となったことを肯定的に受け止させていたと述べた研究がある。これらの研究内容も、谷口氏の講義から事前学習として学びもって実習に参加している。

異文化を持つ女性への支援の体験は意味あるものであり、ハワイだけではなく日本にあっても同様なことが言える。従って、日本にいる外国人へ

の関わりとして、異文化の理解と受け入れ、尊重、価値観を認めた妊産褥婦への必要性がある援助をすることの大切さを学べた実習であった。特に、異文化への体験は、現地で、異国の人と接し言語を通して学ぶことで教育成果が上がると考える。

文献

- 藤原ゆかり (2006)：異文化圏からの人々の出産に対する助産ケアの現状－文化を考慮したケアの実現に向けて－，日本助産学会誌，20(1)，pp.48-59.
- 藤原ゆかり (2008)：Culturally congruent care の概念分析，日本助産師学会誌，22(1)，pp.7-16.
- 福山知子 (2006)：助産師として異文化で活動するという事，助産雑誌，60(5)，pp.444-449.
- 我部山キヨ子；毛利多恵子編集 (2010)：在日外国人の母子保健，海外在住日本人の母子保健，国際母子保健論，助産学講座9. pp.183-199，医学書院，東京.
- 大澤絵里 (2011)：国際協力活動中堅看護職のコンペテンシー獲得の過程－赤十字国際活動に従事した看護職の体験より－，日本赤十字看護大学紀要，25，pp.65-74.
- 李節子 (2006)：多文化共生時代に求められる母子保健，保健師ジャーナル，62(12)，pp.996-999.
- 佐山理絵 (2008)：学部教育における国際看護学実習の展開－タイ王国での活動を中心に－，東邦大学医学部看護学科紀要，22，pp.27-32.
- 新福洋子 (2010)：国際助産師活動のためのcultural humility タンザニアでの助産活動の経験から学んだこと，助産雑誌，64(11)，pp.1010-1015.
- 鈴木美恵子 (2011)：カンボジアでの国際保健助産学実習における大学院生の体験，日本赤十字社紀要，25，pp.75-84.
- 谷口初美，松山敏則，島田三恵子 (2000)：日本人女性の異文化での妊娠・出産に関するコーピング(対処)と今後の母子保健対策－ハワイ州ホノルルでの調査－，母性衛生，41(4)，pp.388-397.
- 谷口初美 (2011)：母となる意味：外国での出産体験，母性衛生，51(4)，pp.569-577.